岩手・向中野館遺跡（むかいなかのだて）

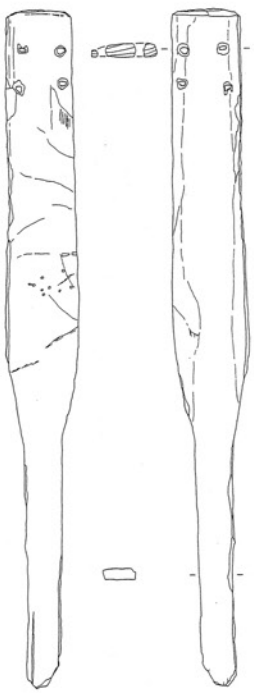
1 所在地　岩手県盛岡市飯岡新田二地割
2 調査期間　第六次調査　二〇〇四年（平16）六月～一〇月
3 発掘機関　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
4 調査担当者　北村忠昭・早坂　淳
5 遺跡の種類　集落跡・城館跡
6 遺跡の年代　古代～近世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

向中野館遺跡は、ＪＲ盛岡駅の南方約二・五㎞に位置し、雫石川右岸の低位段丘及び氾濫原旧河道上に立地する。今回の調査面積は、計三〇七四㎡で、調査の結果、平安時代の土坑・包含層、中世の堀・柱穴群、近世以降の溝などを検出した。

木簡は包含層ＲＺ〇〇七から二点、中世の堀ＲＧ〇〇六から二点、遺構外から一点、計五点出土した。ＲＺ〇〇七は、九世紀初頭から一〇世紀前半（主体は九世紀後半）にかけての包含層である。調査区を東北東から西南西に流れる旧河道の南岸に形成されており、併行して実施した第五次調査の範囲にも広がり、東西約三一ｍ南北約二一ｍ面積約四三八㎡に及ぶ。土師器や須恵器などの土器のほか、小刀や刀子などの金属器、漆器などの木器が出土している。土師器や須恵器には墨書や刻書が多く見られ、回転ヘラ切りの須恵器の底部に「厨」の墨書が見られるものもある。

また、第五次調査の範囲のＲＺ〇〇七からは、墨痕の確認できない封緘状木製品が出土している（長さ三五八㎜幅三八㎜厚さ一一㎜）。スギの板目材で、上端は折り取り後、表面側を側面削りによって面取りを行なっている。下端は左右両側から側面削りで圭頭状に整形しているが、中心は右側にずれる。左右両辺は割りの後、削りによる整形を行ない、表面の左右両辺側は薄くなっている。上部には貫通孔が左右二対、計四個ある。また、裏面には直径一㎜程の非貫通の小孔が九個ある。

（盛　岡）


RZ007出土封緘状木製品

中世の堀ＲＧ〇〇六は、上端幅約八ｍ下端幅約五ｍで、中世の居館である向中野館を構成する方形の堀の一部と考えられる。珠洲産とみられる擂鉢が出土しており、時期は一五世紀と考えられる。

8　木簡の釈文・内容

堀ＲＧ〇〇六

(1)　「□南□　(82)×24×3　019

(2)　「□　(75)×17×2.5　019

包含層ＲＺ〇〇七

(3)　□家　(65)×20×2　081

(4)　□　(54)×(12)×1.5　081

遺構外

(5)　□大□皆成不　(134)×19×3.5　081

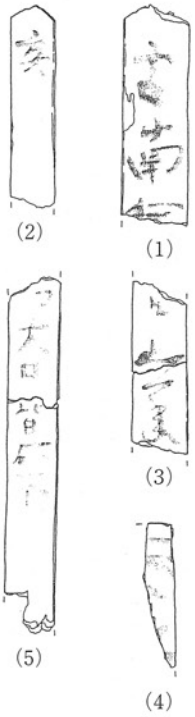
(1)はスギの柾目材で、上端の一部は欠損、下端は折れ。左右両辺は割りの後、削り整形を行なっている。(2)はスギの柾目材で、上端は圭頭状に整形している。下端は右辺から水平に刀子で切り込みを入れ、下部を折っている。裏面上部には二条の線刻が認められるが、墨痕は確認できない。表面の墨書は一字であることは疑いないが、不鮮明で釈読できない。

(3)は柾目材で、上下両端は裏面側の右斜め上から切り込みを入れ、それぞれ上部・下部を折っている。裏面の上半部にも同様の切り込みが見られる。中央部には裏面側からほぼ水平に切り込みを入れ、折っている。左右両辺は割りの後、削り整形を行なっている。(4)は柾目材で、上端は折れ、左辺から下部は割れ。材の厚さはほぼ一定で、表裏に整形の差異は見られない。

(5)はスギの柾目材で、上端は折れ、中央部及び下端は左辺より水平に切り込みを入れ、折っている。左右両辺は割りの後、削り整形を行なっている。

なお、釈読にあたっては、奥州市総合政策部企画調整課世界遺産登録推進室の石崎高臣氏のご協力を得た。

（北村忠昭）



(1)　(2)　(3)　(4)　(5)